
VRまおー様！

義雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VRまおー様！

【Nコード】

N7630Y

【作者名】

義雄

【あらすじ】

そこそこ人気なファンタジーVRMMO「ぱられる すたー」、月給三十万円で魔王のバイト、しませんか？ 傲岸不遜なまおー様（高校生アルバイト）と素直な悪魔っ子NPCが織りなすほのぼのMMOもの。

第零話 まお様の初陣（前書き）

ごろごろしながらのんびりゆる〜く楽しんでください。

第零話 まお様の初陣

人、人、人。

銅色の煌めきが峡谷の狭い地を進軍している。

俺は城のバルコニーからその光景を見下ろしていた。

「くつくつくつく……」

「あの、魔王さま？」

「はぁーはっはっはっはっはー！」

「絶望的過ぎて笑うしかないとか？」

「バカ、様式美だ」

身に着けている感覚がないほど軽い、黒の鎧。

名前を聞いたこともない生物の皮から造ったらしいマント。

そして腰には圧倒的存在感を放つ無骨な長剣。

これらを装備した黒髪黒目の偉大な存在、すなわち俺様だ。

「大口あけて笑ってる場合じゃないと思うんですけど……」

人が気分よく笑っているのに茶々を入れてくる悪魔らしからぬ悪魔っ子なんぞ無視だ無視。

悪魔のくせに貧乳とは何事か。

「お前は豊胸体操でもしてろ」

「ひどッ！ 気にしてるのに……」

背中に生えたコウモリの羽根をしょんぼりさせてるが、知ったこっちゃあない。

なんだって俺は魔王だからだ。

「さて、何人くらいいるものやら」

五十か百か、ひよつとすると二百人を超えているかもしれない。
そのくらい城を包囲する軍勢は多く、なるほど律儀に豊胸体操を
はじめたへっぽこ悪魔がビビるのも無理はない。

「ガイコツ軍団を正門前に出せ」

「さん、しー。あ、はい」

だがしかし、俺の率いる軍勢は五千を超える。

ガイコツ兵どもは折り畳み可能で、さほど大きくない城内にたくさん
収納できるのだ。

無論食事も必要ないので維持費もほとんどかからない、素晴らし
い。

大きな音を立てて堀に跳ね橋がかかる。

その上を曇天の下でも真っ白な骨々軍団が粛々と行進していく。
スペース的に千も出せなかったが、十分だ。

「くくくくく、人間どもを見る。絶望の表情を」

「……絶望、してますか？」

「え、してないの？」

「してるようには見えませんね」

一瞬思わず素に戻ってしまった。

マントから取り出した双眼鏡を覗き込んでみると、確かにまったく
絶望していない。

むしろ目つきがぎらぎらと輝いている。

「いや、戦争は数だ。五倍以上の兵力差を覆せるはずがない」

「あの……それなんですが」

「問答無用！　かれガイコツどもっ！！」

俺の号令で一斉に骨つ子たちは駆けだした。

人間どもは動かない。

戦において衝力は非常に重要だ、と昔本で読んだことがある。

勢いのついたガイコツ兵と迎え撃つ人間、攻撃力の違いは明らかだった。

鎧袖一触

そんな四字熟語が相応しいほど清々しい結果が目の前に広がっている。

「え……？」

「ガイコツは折り畳みできるから衝撃にも弱いんですよ。盾で一発殴られたら頭がい骨が吹っ飛んでそれ拾いにいっちゃいますし」

「なにそれ」

「言ってませんでしたっけ？」

「聞いてない！！」

この役立たず悪魔にどんなオシオキをしてやろうかと考えている間にもガイコツたちはガスガス盾で殴られていく。

五倍以上も差があったはずが、もう同じくらいの数しか戦っていない。

対する人間どもは、あからさまに貧弱そうな装備をしているヤツらだけが消えて、残るは五十くらいといったところ。

だがそいつらが強い、スリムな骨たちなど相手にならないようだ。あっちこっちに転がっていく頭を追いかけるガイコツ達はシュー

ルだった。

「くっそー」

「どうします？」

「犬人間部隊は」

「ガイコツとそんな変わりませんよ」

「じゃあ猫人間！」

「あいつら嬉々として捕獲していきます」

「……切り札の竜人間」

「休暇で故郷に帰ってます」

「なんだそりゃ！」

どいつもこいつも使えないいたらありやしない。

ここは一つ、やるしかあるまい。

「俺が出る」

「魔王様……死んじやいますよ？」

「死ぬかバカ！」

「でもでも、逃げた方が……」

黒髪の悪魔っ子が寂しそうな目で俺を引き留め、さらには敵前逃亡を促してきた。

NPCのくせに、なかなかどうしてぐっと引きつけられるものがある。

しかし、情にほだされるわけにはいかない。

月給三十万という破格のバイト代がかかっている。

それに俺は絶対負けれないという確信があった。

「心配するな。魔剣『チート』がある限り俺は無敵だ」

すらりと鞘から抜き放った魔剣は、無骨を通り越していつそ手抜きとっていいほどシンプルだ。

最初の村や町で三番目くらいに強い武器として売っていてもおかしくない。

グラフィックにもっと凝れよとは思うが、逆にこれ以上ない頼もしさを感じさせる。

「とうっ」

「魔王様！」

高さ二十メートルはあるつかというバルコニーから颯爽と飛び出す。

軽く飛んだだけなのにぐんぐんと飛距離は伸び、跳ね橋の上に音もなく降り立った。

ガイコツどもをしばいていた人間の視線が一斉に集中した。

「アレが魔王……」

「見た目は普通だな」

「所詮は過疎狩場の再活性ボスだろ」

好き勝手ほざいてくれる。

ざわざわと囁き合うだけで奴らは俺に近づこうとしない。

『チート』をまつすぐに突きつける。

良く聞こえるように大きな声で、だが皮肉気に言葉をかけてやるうじゃないか。

「かかってきなチキンハートども」

挑発してやると反応がガラリと変わった。
面白いくらいに驚いた顔をしてくれる。

「口、悪ッ！」

「てか喋るボスって初じゃね」

「……誰が声あててるんだ？」

それでも近づいてこない有象無象を差し置いて、三人の男女が歩み出す。

一人は褐色の肌に巨大なハンマーを担いだ渋い大男。

その傍らに体が丸ごと隠れる長方形の盾と、俺の持つ『チート』よりよっぽど装飾にこった剣を持つ金髪イケメン野郎。

二人の背後には白いフード付きローブに杖を構えた小柄な女。

この説明だけだといかにもカッコよさげに聞こえるだろう。
だが違う、眼の色が違う。

「レア武器……」

「新盾……」

「魔法書……」

亡者の瞳つつーのはこのことか。

とにかくヤバ気な雰囲気をぶんぶん放っていた。

じりとイケメン野郎の足が動く。

「どりゃあっ！」

でっかい盾など関係ないと言わんばかりの跳躍だった。

高い、そして速い。

だが、俺の前ではすべてが無駄！

「まおうさまサンダー！」
「なにッ!？」

『チート』の剣先から巨大な轟雷が放たれた。
空中で回避もままならずイケメンは呑みこまれる。
あとには何も残らなかった。

「い、一発!？」
「盾持ち一撃とか反則だろ！」

仲間の悲劇に怯えたのか、二人はすぐさま逃げ出そうとする。
だがしかし、逃しはしない!

「まおうさまファイアー！」
「くっ!？」

黒髪の巨漢は赤々と燃える炎で包み。

「まおうさまアイス！」
「無理よこれ！」

白ローブの女は氷山で押しつぶす。
この間わずか十秒、愚民どもはバカみたいに口を開けて固まっていた。

「ランカー瞬殺って……」
「ムリムリムリ！」

潮が引くように人間が逃げていく。
俺は無理に追いかけてたりしない。

なぜなら待ち構えることこそ魔王っぽいからだ。

理由はもう一つある。このゲーム、死亡時のペナルティとしての日はもうログインできない。

ゲーム内に恐怖を振りまくためには生かして帰す必要があるのだ。そして、案の定逃げ出す奴らとは逆に突っ込んでくる愚か者もいる。

「デスペナなど恐れぬ！」

「カミカゼアタックじゃ！」

こんな輩がいるからこそ魔王にも張り合いが出るってもんだ。

「その意気やいさぎよし！！」

時代がかった言葉も今は恥ずかしくない。

こいつらの心意気に応えるためにも、一撃でカタをつける！

「まおうさまスラッシュ！」

奔る銀閃と一瞬の交錯。

俺の少し後ろで着地した二人は、膝から地面に崩れ落ちた。身体は光に包まれ消えて行った。

「こんなところか」

あたりに誰もいないことを確認してから『チート』を鞘に納める。

「みんな帰るぞー。てかお前らちつとは役に立て！」

いつの間にやら千体分の頭を回収し終えたガイコツ軍団と一緒に

跳ね橋を渡る。

魔王としての初仕事、そして初の凱旋。
気分はなかなか上々だ。

「魔王様……」

「おうへっぽこ、蹴散らしてきたぜ」

城門をくぐると、瞳がうるうるしているショートボブのへたれ悪魔が待ち構えていた。

「魔王様あー!!」

「うおっと」

「よかった、よかったですう……」

抱き着いてきた泣き虫悪魔の頭をぐりぐりとなでてやる。
これが巨乳美女なら慌てたかもしれないが所詮は貧乳。
俺の琴線には欠片も触れぬのだよ。

「そろそろ邪魔だへっぽこ、離れろ」

「はい……っっていうか名前で呼んでくださいよ!」

「めんどい」

魔王とは偉大なのだ。

一々部下の名前を把握しているのは魔王っぽくない。
どちらかと言えばクラブ活動の部長だとか、それっぽい。

「わたしにはヴァレリアって名前があるんですよ!」

「はいはい、てか「ヴァ」っていうのが言いにくい」

「綺麗に発音してるじゃないですか!？」

「ヴァヴァヴァヴァー」

「なんなんですかそれ！」

きゃんきゃん犬みたいに騒ぐ悪魔っ子を従えて俺は、
間大悟^{はざまたいご}はた
め息をついた。

第零話 まお様の初陣（後書き）

後書きは魔法の解説にあてていきます。

まおうさまサンダー

エフェクト：車を丸のみにできるほどでつかい雷

対象：イケメン or モテ男

効果：即死

説明：雷を司る下位神レヌスは醜い顔をしていた。天界の神々で彼を嘲笑しないものはほとんどいない。同時期に生まれた神は次々と妻帯していくのに対し、彼はいくら求婚しても女神から鼻で笑われるか、ひどいときには罵声を浴びせられた。しかし、そんな彼に優しくする女神が一人だけいた。さほど美しくはない女神だったが、レヌスは彼女にどんどん心惹かれていく。そして求婚しようと決意を固めた日、彼女に婚約者を紹介された。イケメンだった。レヌスは深く絶望しこの世全てのイケメンを呪いながら命を落とした。そんな哀しい神の慟哭の末生まれた魔法が「まおうさまサンダー」だ。殺意と、その他諸々の負の感情がイケメンとモテ男を死に誘う。女性や平均的な容貌の者には一切効果がない。レヌス基準で容姿に恵まれない者が受けるとレベルが五あがる。

第一話 まお様と紅茶

ことの起こりは至ってシンプル。

高校一年生になった俺は遊ぶ金欲しさにバイトを探していた。

夏休みだからということもあってか、様々な職種が求人誌や電子空間に漂っている。

だが高校生不可という制限も多かった。

そんな折たまたま目についたVRMMO「ぱられる すたー」の魔王募集告知。

面接会場も近いし行ってみた、結構な数の人がいた。採用された。

「というわけで今日から俺は魔王様なのだ」

「なに言ってるんですか？」

「様式美だバカ」

紅茶を淹れながら腰抜け悪魔がキョトンとしている。

俺はコーヒー党なんだが、たまにはいいか。

悪魔なのに戦闘力皆無なコイツも少しは俺の役に立ちたいってことだろう。

あまり飲み食いするなと言われたが折角淹れてくれたんだ、部下の気遣いは無碍にしないのも魔王なり。

「うむ、苦しゅうない」

「はあ……よくわかりませんけど」

白磁のティーカップに注がれた紅茶は、文字通り紅い。

紅茶ってもつと茶色系のイメージがあったんだが気のせいだろうか。

ゆらゆらと上る湯気を鼻いっぱい吸い込む。
悪くない、スモーキーというのか、燻製とかそんな感じだ。
口をつける。

「ブーッ!!」

「きゃあっ!?!」

嘔き出した。

「ま、まっず。なんだこれ」

「ひどいです……高い紅茶なのに」

びしょ濡れになった不器用悪魔が非難するような目つきで見てくるが、文句を言いたいのはこっちだ。

「煙の味するお茶ってなんなんだよ!」

「ラブサンスーチョンです。どこかの国の王妃様も好きだって聞きました」

「なんだそのロシアの怪僧っぽい名前は」

こんな煙たい味の飲み物を好んで飲むヤツがいるとは、世の中は広い。

「とにかく却下だ却下。真っ当なモン持って来い。インスタントコーヒーでも可」

これは『まおうさまスプラッシュ』として使えるな、とかいう思考は脇に置いて。

正直な話、俺は驚いていた。

所詮これはゲームの中だ、なのに味がする。

これは何気にすごいことじゃないのか？

味覚というものが何に由来するのか知らないが、VR技術とやらを開発したヤツは大したもんだ。

「俺の次くらいに偉いかもな」

「なにがですか？」

「独り言だ、気にするな」

口の中にはまだ煙っぽさが残っているけれど顔には出さない。

魔王が青汁飲んで表情を歪めたらどう思うか。

誰しもそんな魔王っぽくないと感じるだろう。

だからやせ我慢でもポーカーフェイスだ。

まったく、いい天気とは言えないけれど折角城のバルコニーでお茶会というこの上ない優雅なイベントだったのに。

あんなものを飲まされるとは、魔王も楽じゃない。

「でも、良かったです」

ティーセットを片づけながらヴァレリアが言う。

心の底からこぼれたような、自然な声だった。

「なにがだ？」

威厳を出すために少し低めの声で問う。

メイド悪魔は微笑んだ。

「魔王様が来てくださって、です。魔王様がいなかったら、この城は人間に攻め滅ぼされてましたから」

「……ならもつと崇拜することだな」

「はい！」

「手始めに美味しい紅茶を淹れられるようになれ。コーヒーの方が好みだがな」

なんとも、やりきれない話だ。

このゲームは少しリアルすぎる。

所詮目の前のコイツもNPCだというのに。

そんな世の無常さをシリアスに儚んでいるとき、迷子のお知らせみたいな音が耳に入った。

『ランカーを瞬殺した峡谷の古城新ボス討伐メンツ募集！当方90盾85癒、囁ヨロ！』

続いて目の前に現れた文章に俺は口を釣り上げた。

誰かが百円で買える「アナウンス」というポイントアイテムを使ったようだ。

目的は俺の討伐、面白い。

「くくくくく、愚かな」

「魔王様……」

「案ずるな」

子犬みたいな悪魔の頭をぽふぽふと撫でてやる。

「一匹残らず殲滅してくれる」

跳ね橋前にロッキングチェアだけ用意させて、ヴァレリアは城に引っ込ませた。

VRセンター昼の部が閉まるのは六時、強制ログアウトが始まるのは五時半。

今の時刻はちょうど五時。デスペナでログインできなくなっても問題ない時間だ。

「さて、どうするか」

懷から本を取り出してパラパラめくる。

題名はズバリ「魔剣『チート』の使い方」だ。

今日がバイト初日だからまだ全部覚えていないのだ。

そして魔王たる者部下にこんな姿を見せてはいけない。

白鳥のように水面下で努力する。それが役者、違った、俺が理想とする魔王だ。

魔剣『チート』は無駄に機能が多い。

取説は魔法説明だけでも二十六ページある。

プログラムA、B、Cことサンダーファイアーアイスは使ったから別の魔法を使いたいところだ。

ゆらゆら椅子を揺らしながら必死に頭を巡らせる。

プログラムGとかいいかもしれない。

いや、それともWか。選択の幅が広いというのも困りものだ。

「あのか？」

「ちよっと待て、今忙しい」

誰だか知らんが話しかけてくるな。

忙しいのが見てわからないのか、これだからゲーム世界の住民は……あれ。

「ん？」

顔をあげると総勢五十名ほどの人間がいた。
さっきのヤツらより強そうな装備品で身を固めている。

「おお」

思わずポンと手を打つ。

そうだ、俺は今魔王だった。

バイト代のためにも戦わないといけないんだ。
勢いよく椅子を揺らして飛び上がる。

「よく来たな愚かな人間どもよ！」

三十分ほど練習した派手に見えるマントの翻し方を披露しながら
プレイヤーを睨みつけてやる。

だが、イマイチ反応が芳しくない。

どこか困惑した様子でひそひそ囁き合っている。

「どんなAI使ってたんだ……」

「いや、反応が違うだろ、人間じゃね？」

む、これはよろしくない。

俺はあくまでも魔王というボスだ。

マスコットキャラの着ぐるみのように「中の人などいない！」で

通さなければならぬのだ。

理由はよくわからんがそう契約書に書いてあった。

かと言って誤魔化し方など思いつくはずもない。

とりあえずマントを翻した格好のまま硬直してみる。

「……いや、AIじゃなきゃあんなマヌケな姿で固まらんだろ」

「確かに」

「はじめてのボイスキャラだったから変に考えすぎだろ」

確信した。コイツらはバカだ。

だが、なぜだろう。無性に沸々と煮えたぎるものがあるのは。

「硬直してるし有効範囲に入らん限り大丈夫だろ。作戦通り半円で一斉に魔法斉射でいくぞ」

リーダーらしき緑色の髪をした盾持ち髭男の号令でぞろぞろと俺を囲みだす。

半径十メートルほど距離を取りつつお喋りしながら半円陣をとる。

魔法で一気に消し飛ばしてやりたいが、今は我慢だ。

三十万のためにも俺は耐えなければならぬ。

羊だ、羊を数えて落ち着け。

いち、に、さん、よん、じ。

「詠唱開始いー！」

そうこうしている内に準備を整えた魔法使いっぱい奴らがぶつぶつと何やら唱えはじめた。

このゲームは変なところで凝り性だ。

俺みたいに魔法の名前を叫ぶだけでは発動しないらしい。

跳ね橋は上がっていて強そうな奴らには包囲されている。

詠唱も終わるころ、じきに人数分の魔法が飛び交い俺を攻撃してくるだろう。

なかなか絶望的な状況だ。俺がふつうのプレイヤーかモンスターであるならば。

「放てッ!!」

腰の長剣を、無骨な魔剣『チート』を抜き放つ。
唱えるのはたった一言。

「まおうさまバリアッ!」

「バリア!?!」

足元からおおよそ半径五メートル、乳白色の光がせり上がり、ドーム状の壁を形成した。

派手な音をたてて魔法がぶつかっているようだが小揺るぎもしい。

まさに鉄壁!

いや、鉄じゃなくて光だから光壁!

ただ時々壁をすり抜けて炎やら氷やらが飛んでくる。

それを『チート』でバシバシ叩き落として、もう一度ロッキングチェアに腰掛けた。

いつこの壁は解除されるんだろう、と考えていたらさっと視界が開けた。

「バリアは反則だろ!」

「無傷とか……」

余裕綽々の俺を見て愚民どもがおののいている。

圧倒的な防御力は見せつけた。

次は、無慈悲なまでの攻撃力を目に焼きつけさせてやろうじゃないか。

「くはははは！ 滅びるがいい愚かな虫けらどもよ！！」

ああ！ 俺今すつごい魔王っぽい！

このバイトは天職に違いない！

「まおうさま……」

リーダーらしき男に『チート』を差し向けると、三角形の盾を構えた。

他の盾を持った奴らもマネして、魔法使いたちは忙しく口を動かしている。

だが、すべてが無駄！

「ハリケーン！！」

強風や暴風などという表現すら生ぬるい凄まじさ。

鎧を身に着けた人間を宙に巻き上げるなんて、もはや竜巻に近いだろう。

ほとんどすべての男を虚空に放り投げ、やがて風がやむ。

空中浮遊を楽しんでいたはずのヤツらは空で光に還り、地上には帰ってこなかった。

「さて……」

一歩踏み出す。

残った人数は十名ちよつと、女性比率が圧倒的に高いのが気になるけれど、まあいい。

『チート』でぽんぽんと右肩を叩き、できる限り邪悪に笑った。

「じゃ、死んでくれ」

第一話 まおー様と紅茶（後書き）

まおうさまファイアー

エフェクト：市民プールくらいに広がる真っ赤な炎

対象：マツチヨ

効果：即死

説明：炎を司る下位神エリフには悩みがあった。他の炎神は鍛冶も担うため筋骨隆々としている。なのにエリフは一人だけえのき茸のように白く、細かった。このままではいかんと筋力トレーニングに励みだしたが、効果は一切あらわれない。最初は応援してくれた他の神々も次第にはネタにするようになり、仕舞いには『ぶるぶる震えて筋トレするエリフ』という飲み会のモノマネ鉄板ネタになつてしまった。しかし彼は諦めなかった。体をいじめるだけで足りないなら食事を変えるべきだと様々な食材を求め歩いた。ある時、悪戯好きなキルツという夜の神に教えられ、猛毒の植物を口にしてしまう。エリフは三日三晩苦しみぬいて、ついにはムキムキになるという夢を果たせず息絶えてしまった。今わの際に彼が思ったこと、それはマツチヨに対する嫉妬心だ。そんな恵まれない神の報われぬ努力の末生まれた魔法が「まおうさまファイアー」だ。嫉妬とその他諸々の負の感情がマツチヨを死に誘う。女性や平均的体型の者には一切効果がない。エリフ基準で細身の者が受けるとレベルが五あがり、その分のステータス（25ポイント）がすべてSTRに振られる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7630y/>

VRまお一様！

2011年11月23日08時49分発行